

【研究ノート】

国家の必然性とその本質

——エンゲルス国家論の分析を中心として——

加 藤 義 忠

I

現代資本主義ともよばれる今日の国家独占資本主義下において、国家の経済への介入がいっそう強まり、独占資本ないしは金融資本と国家の支配力を強めるための結びつきがより深くかつより広範囲に進行している。このことは別のいい方をすれば、支配階級は資本主義経済に内在する生産力と生産関係の矛盾の先鋭化に直面して、社会のうえにそびえ立ち社会からますます疎外された存在物となっている絶大な国家の公的な権力を総動員することによって、それに対応しようとしていることの経済的表現である。

このような状況下で、現存の資本主義体制を擁護しようとする側に立つのか、逆にそれを変革しようとする側に立つのかという基本的立場をこえて、また経済学にかぎらず政治学などの他の社会科学の諸分野をも含めて、国家それ自体の問題ないし国家と各分野とのかかわりの問題などが1つの重要な論究課題となっているのは、けだし当然のことであろう。

たとえば、現代経済学の部面でもマルクス経済学かあるいは近代経済学かを問わず、経済と国家の関連の分析が一大関心事となっている。なかでも、前者のマルクス経済学の領域では、それは主として国家独占資本主義論の中心テーマとして位置づけられ、一定の研究成果が蓄積されている。私の専攻分野である商業経済論ないしは流通経済論の分野でも、流通と国家の関連の

問題について近年ますます立脚する立場をこえて注目されるにいたり、一定の研究成果も公表されている。しかしながら、経済学の他の分野に比して、この分野での研究にはその量的側面だけでなくその質的な深みにおいても若干の不十分性が存在していることは否めないように私には思われる。このことは一面では、資本の再生産過程における流通の役割から必然的に生ずる事柄すなわち生産や金融にたいする国家の介入よりも流通にたいするそれはややおくれるということだけでなく、相対的に軽度であるということの理論面への反映であろう。しかし、このことは他面では、この課題にたいする研究する側の姿勢がやや消極的であることの反映でもある。この若干の消極性は、1つには資本主義社会が経済の動向によって基本的に規定されて展開していることから、経済ないしは流通の分析をもって十全なものとして、それと国家との関連の分析を切り捨てるかあるいは軽視するいわゆる経済主義的ないしは流通偏重的研究傾向にもとづくものであろう。それにくわえて、これはもう1つには流通と国家の関連を分析対象に含められる場合でも、それ自体を正面にすえて国家論にまでさかのぼって説き起こそうとする本格的な研究態度がやや欠けていることによるものであろう。

私は上記のような問題状況の認識をふまえて、流通とりわけ現代流通と国家の関連の課題をとりあえず基礎理論的な次元で研究しようと考えている。このさいに、可能なかぎり視野の広い基礎のしっかりした研究であることが望まれるので、その予備的考察として国家論そのものにまで立ちかえて考えてみる必要がある。そこで以下において、私はマルクス主義的国家論における原典ともいえるエンゲルスの古典的名著『家族、私有財産および国家の起源』を主たる手がかりとしながら、国家生誕の必然性およびその本質や一般的諸機能ならびにその発展形態と死滅過程などについてやや覚書風に私なりに整理し、若干の注釈をくわえようと思う。

II

「文明社会を総括する」⁽¹⁾ものとしての国家の出現の必然性ないし必要性について、エンゲルスはまず次のようにのべている。「国家はけっして外部から社会におしつけられた権力でない。同様にそれは、ヘーゲルの主張するような、『人倫的理念が現実化したもの』でも『理性が形象化したもの』でもない。それは、むしろ一定の発展段階における社会の産物である。それは、この社会が自分自身との解決しえない矛盾にまきこまれ、自分でははらいのける力のない、和解しえない諸対立に分裂したことの告白である。ところで、これらの諸対立が、すなわち相対抗する経済的利害をもつ諸階級が、無益な闘争のうちに自分自身と社会をほろぼさないためには、外見上社会のうえに立ってこの衝突を緩和し、それを『秩序』のわくのなかにもつべき権力が必要となった。そして、社会からうまれながら社会のうえに立ち、社会にたいしますます外的なものとなってゆくこの権力が、国家である」⁽²⁾。つまり、国家は外部から社会に強制的におしつけられた公的権力ではなく、またヘーゲル流の理性が外化したものでもなく、原始共産制社会から奴隷制社会への移行期において分業の固定化傾向のなかから形成されはじめた私的所有およびこれをめぐる競争に媒介されて生じた有産階級と無産階級への階級分化やそれにとまなう階級間の対立の発生という一定の歴史的発展段階において必然化した社会の自生的な産物であり、私的所有を基礎とする歴史的段階一般において不可欠の構成物となっている。無階級社会としての原始共産制社会においても、成員間に一定の矛盾・対立が生じたであろうことは想像にかたくないが、しかしここでの矛盾は共有を前提とする矛盾であり、したがって和解可能な非敵対的なものであるので、社会内部で十分に解決可能であった。ところが、階級社会の内部に生じた矛盾・対立すなわち経済的利害を

(1) エンゲルス著、村井康男・村田陽一訳『家族、私有財産および国家の起源』国民文庫、1954年、229ページ。

(2) 同上、221ページ。

ことにする諸階級の対立は非和解放的な敵対的な対立であるから、社会自身の内部ではもはやその解決は不可能である。そこで、この諸階級による無益な闘争によって闘争している階級ないし社会全体がほろびないために、外観上母体としての社会のうえに立ってこの衝突を調整し緩和して、それを通例、経済的に支配的な階級の立場に立って総括し秩序づけ、「階級闘争をせいぜい経済的な分野で、いわゆる合法的な形態でたたかわせ⁽³⁾」ようとする公的権力としての国家が必要になる。エンゲルスは他の書物でブルジョア国家を例にとりながら、同様のことを次のようにも記している。「近代国家もまた、資本主義的生産様式の一般的な外的諸条件を、労働者や個々の資本家の侵害からまもるために、ブルジョア社会が自分のためにつくりだした組織でしかない⁽⁴⁾」。ともあれ、国家は社会のなかからいわば自生的に土台の要求に媒介されて生誕し、そして土台としての経済社会のうえにそびえる上部構造の中核に位置して、土台の要求に基本的に応じるかたちで土台にたいして一定の反作用をおよぼす。しかも、歴史がすすむにつれて国家は社会の内部の要求をさらに強く受けながら、他面では社会にたいしてますます外的な存在物としての性格を強め、相対的に独自の運動を行なう可能性をより大きくする。換言すれば、国家は社会に内在する矛盾が大きくなるにつれて、ますます巨大な機構となり、同時にその相対的な自立性はより強められるが、このことは逆に国家の社会にたいする規制力、それもあとで詳しくのべるように支配階級の要求にもとづく規制力がいっそう強力なものとなることを意味する。

上述のように社会の内部に発生した非和解放的矛盾を社会のうえに立って調整し緩和して、その矛盾を一定の枠組のなかに制御し秩序づけるために出現した国家は、人間社会のなかから基本的には支配を志向する人間のいわば生活の知恵として「発明された⁽⁵⁾」制度である。したがって、国家は一般的には階級対立を完全に中立的な立場から調整し総括して社会の統一性を保持する

(3) 同上、220ページ。

(4) エンゲルス著、寺沢恒信訳『空想から科学へ』国民文庫、1953年、105ページ。

(5) 前掲書、140ページ。

機関であると規定づけることはできない。だが、実際において、封建制社会から資本主義社会への移行期の絶対君主制や資本主義の一次的動揺期のフランスにおけるボナパルティズムならびに資本主義から社会主義への移行期のロシアにおけるケレンスキー政府などのように世情の不安定な時期に均衡的な勢力のうえに一時的に歴史の舞台に登場した中立的な国家が例外的に存在した⁽⁶⁾し、また今なお資本主義社会にとどまっている国々において革命的な変革のエネルギーが高揚する時期ないしはこれが持続化し新しい社会主義社会への移行を開始する過渡期において、資本家と労働者の力関係がほぼ均衡化する一時期にかぎり、このような両階級にたいしてある程度の独自性をもつ中立的な国家の出現の可能性を否定することはもちろん正しくない。しかしながら、一般的な形態においてとらえれば、国家はその時々を経済的な支配階級の利害たとえば資本主義下では資本家階級の利害を基本的に擁護し、それを法によって正当化しながら、社会の有機的構成体としてのまとまりを維

(6) この点について、エンゲルスは次のように指摘している。「しかし、例外的には、あいたたかう諸階級がたがいにほとんど力の均衡をたもっているため、国家権力が外見上の調停者として、一時的に両者にたいしある程度の独自性を得る時期がある。たとえば、貴族と市民階級とがたがいに勢力伯仲した17世紀と18世紀の絶対君主制がそれであり、ブルジョアジーにたいしてはプロレタリアートを、プロレタリアートにたいしてはブルジョアジーをけしかけた、フランスの第1帝制、とくに第2帝制のボナパルティズムがそれである。この種の最新のだしもので、支配者も被支配者もひとしくこっけいな役まわりをはたしているのは、ビスマルクの国民からなる新ドイツ帝国である。ここでは、資本家と労働者とがたがいに力のつりあいをたもたせられ、零落したプロシヤの田舎ユンカーの利益のために一様にかたりとられるのである」(『家族、私有財産および国家の起源』224ページ)。また、レーニン『国家と革命』においてエンゲルスの指摘につけくわえて、下記のようにいっている。「われわれのほうでつつけくわえるが、革命的プロレタリアートの迫害にうつつのちの共和制ロシアのケレンスキー政府、すなわちソヴェトは小ブルジョア民主主義者が指導していたためにすでに無力であったが、ブルジョアジーは、まだソヴェトを直接に解散させることができるほどつよくなかった時期のケレンスキー政府がそうである」(『レーニン全集』第25巻、大月書店、1957年、423ページ)。

持する公的権力である。しかも、この権力は「特殊な公的強力」⁽⁷⁾や財政に基礎づけられている。すなわち、「国家は階級対立を抑制しておく必要から生じたものであるから、しかし同時にこれらの階級の衝突のただなかに生じたものであるから、それは、もっとも勢力のある、経済的に支配する階級の国家であるのが普通である。この階級は国家をもちいて政治的にも支配する階級となり、このようにして、被抑圧階級を抑圧し搾取するための新しい手段を獲得する。こうして、古代国家は、なによりもまず奴隷を抑圧するための奴隷所有者の国家であったし、それと同じに封建国家は農奴と隷農を抑圧するための貴族の機関であった。そして、近代の代議制国家は、資本が賃労働⁽⁸⁾を搾取するための道具である」。マルクスも資本主義国家を例にとりながら、エンゲルスと同じ内容のことを次のようにいっている。「国民そのものから独立し国民に優越する体現であると主張しながら、その実、国民の身体に寄

(7) エンゲルス『家族、私有財産および国家の起源』123ページ。

(8) 同上、223～224ページ。

エンゲルスは同様のことを、他の箇所では次のようにも記述している。「大部分の歴史上の国家では、国家の公民にみとめられている権利に資産による差等があり、そのことによって、国家が無産階級にたいする防衛のための有産階級の組織であることが、ろこつに表明されている」(同上、224ページ)。あるいは、「文明社会を総括するものは国家である。それは、すべての典型的時期には例外なく支配的階級の国家であり、そしてあらゆるばあい、本質上、被抑圧・被搾取階級の抑圧のための機関である」(同上、229ページ)。しかも、彼は別の書物では下記のように書いている。「階級対立のなかで運動してきた従来の社会は国家を必要とした。いかえれば、そのときどきの搾取階級が自分の外的な生産条件を維持するための組織、したがってとくに被搾取階級を既存の生産様式によってあたえられた抑圧条件（奴隷制、賃労働制）のなかにむりやりにおさえつけておくための組織を必要とした。国家は社会全体の公式の代表者であり、目に見える一つの団体に全社会を総括したものであった。しかし、国家がこのようなものであったのは、ただ、それ自身がその時代に全社会を代表していた階級の国家であったかぎりでのことだった。すなわち、古代では奴隷を所有する公民の、中世では封建貴族の、現代ではブルジョアジーの国家である」(『空想から科学へ』108ページ)。

生する贅肉⁽⁹⁾」である「国家権力は、労働にたいする資本の全国的権力、社会的奴隷化のために組織された公的権力、階級専制の道具 (engine) という性格をますますおびるようになった。階級闘争の一前進段階を画する革命が起るたびに、そのあとで、国家権力の純然たる抑圧的な性格がますますはっきりと現われてくる⁽¹⁰⁾」。

このように国家は一般的には、経済的な支配階級の利益に奉仕する機関であるといつてよい。そして、このことは機能の面にかんしていえば、国家の公的な管理機能はすべて階級的な形態をとって階級的機能としてはたされていることを意味する。その階級的機能の中軸には、それぞれの階級社会の発展段階において特殊な形態をとるけれども、その階級社会に固有の政治的・軍事的・イデオロギー的な抑圧ならびに支配階級の内部矛盾の調整や彼らの経済的な支配への支援としての抑圧的機能が位置し、私的所有にもとづく特殊歴史的な体制を維持しつつ自己の利益を大きくしようとする支配階級の階級的⁽¹¹⁾要求にもっぱら奉仕するために発揮される。他方、国家の階級的機能のなかには、経済的、政治的、文化的な人間の生存にとって国家の有無にかかわらず一般に必要なではあるけれども、個々的にはもちろんのこと結合した組織

(9) マルクス『フランスにおける内乱』（『マルクス・エンゲルス全集』第17巻、大月書店、1966年）316ページ。

(10) 同上、313ページ。

(11) エンゲルスは、国家の中心的機能としての抑圧機能は私的所有を基礎として成立する特殊歴史的な社会体制としての枠組を維持しながら、そのなかでその時代の支配階級の利益を増進せしめることである点について次のようにいっている。「個々人のあらたに獲得した富を、氏族秩序の共産主義的な伝統に対抗して確保したばかりでなく、また、以前にははなはだかろんぜられていた私的所有を神聖化し、この神聖化をあらゆる人間共同社会の最高目的と宣言したばかりでなく、さらに、つぎつぎに発展してくる財産獲得の新しい形態、したがって、たえず速度をくわえる富の増殖の新しい諸形態に、一般的な社会的承認の刻印をあたえた一つの制度が、はじまりつつあった諸階級への社会の分裂を永久化したばかりでなく、さらに無産階級を搾取る有産階級の権利と前者にたいする後者の支配とを永久化した一制度が、そして、この制度はあらわれた。国家が発明されたのである」（『家族、私有財産および国家の起源』140ページ）。

をもってしてもなかなかたしえない社会的な共同業務ないし機能⁽¹²⁾が、国家が存在する場合にはこの国家に基本的に委託され特殊な形態を身につけて現われる機能もある。これは公共的機能とよばれているものであり、多かれ少なかれ階級をこえて社会のすべての人々に共通の利益をもたらす。したがって、これは国家に委託されたいわば正当な機能といわれ、国家の存立を一面では合理化し意義づける役割をはたしている。他面ではしかし、この公共的機能は階級社会においては階級対立をやわらげ、それをとおして私的所有を基礎とする特殊歴史的な体制の安定化に役立ち、支配階級の政治的支配の存続に奉仕するかぎりにおいて、支配階級の意思ないし同意のもとに遂行されるものである。田中富久治氏も指摘されているように、たとえば資本主義下の公共的機能は「敵対的社会構成体としての資本主義社会の『秩序』の維持」という意味での政治的・階級的機能に従属し、それに必要なかぎりで遂行されている⁽¹³⁾。このように公共的機能にも階級的枠組がはめられているが、これは他の国家の階級的機能である抑圧的機能との関連においてみれば、第二

(12) 島津秀典氏は、社会的共同業務について次のようにとらえられている。「社会がひとつの有機的な体制として維持・存続・発展していく基礎には、個別的単位が果たしえないがゆえにどうしても社会的に執行されざるをえない業務がある。このような業務を仮りに『社会的共同業務』とよぶとすれば、この『業務』は社会的分業の一環として個別単位とは区別される主体によって果たされる」（『資本論』体系と国家範疇」経済理論学会編『現代資本主義と国家』青木書店、1980年、123ページ）。

しかも、氏は社会的共同業務を政治的な「統治」の基礎になるものと経済的な「総括」の基礎になるものの2つに区分されている。氏いわく。「資本主義社会において、その発展におうじて国家は『社会的共同業務』をたえず統治活動の対象に転化させながら物的強制力を背景にして資本家階級の共通利害を実現することによって資本主義社会を『統治』し、資本主義的生産—ならびに再生産過程を円滑に支障なく運動させようとするかぎりで資本主義社会を『総括』するのである。……『統治』や『総括』の基礎にはそれが資本主義的形態をまといながら『社会的共同業務』とその執行者がかならず存在し、機能していなければならない」（同上、124～125ページ）。

(13) 経済理論学会編『現代資本主義と国家』青木書店、1980年、58ページ。

義的な副次的な位置を占めるにすぎない。別言すれば、階級をこえて等しく全体の利益になる国家の公共的機能といえども、それは支配階級のための体制の維持・存続という国家の第一義的な目的に規定され、その目的に資する範囲内で行なわれるものなのである。したがって、国家の行なう階級的な抑圧機能に階級性が刻印されていることはもちろんのことであるが、公共的機能にも階級性が投影されており、階級的な制約が課されているといえることができる。宮本憲一氏がいみじくもいわれているように、「国家の役割は、権力的事務と共同事務が並列して存在するのではない。両者の性格はつねにメダルの表裏の関係にあって、この社会のもとでは、権力的総括として統一⁽¹⁴⁾されている」のである。

以上において、国家の出現の必然性およびその基本的性格や諸機能にかんするエンゲルスの考え方の骨子について私なりの理解をしめした。これらの点についてはあとでもう一度より具体的に取り扱う機会があるので、より詳しい説明はそこにゆずりたい。しかしながら、この節の冒頭に引用したエンゲルスの主張についての大内秀明氏の次のような独特な解釈には看過できない問題点をはらまれているので、ここに若干の疑義をさしはさんでおこう。まず、大内氏の説明にしばらく耳をかたむけることにしよう。「ここでは、一方で階級抑圧の道具としての『階級国家』論の見地が強く主張されながら、他方では階級対立によって『社会を消耗させることのないようにするために』、『社会のうえに立ってこの衝突を緩和し、それを<秩序>の枠内に引きとめておく』機能を強調している。したがって、『国家』は階級対立そのものからは相対的に自立して、社会の枠組となるわけであり、一種の『共同の利益』を防衛する役割を重視していることがわかる。それゆえ、『階級国家』論の前提には、『共同体国家』論があるわけであるが、それも歴史的・発生的に前提されているといえよう。だから、もともと存在する『共同体国家』が、階級分裂と同時に、支配階級による階級支配の道具に歴史的に転

(14) 宮本憲一『現代資本主義と国家』岩波書店、1981年、80ページ。

化し、『階級国家』として機能するものとされているわけである⁽¹⁵⁾。しかも、氏は「このように国家そのものは超歴史的であり、そのうち『階級国家』だけが特殊歴史的であるというエンゲルスの理解は、マルクスのそれとは大きな距離があるといっている⁽¹⁶⁾」といわれる。

しかしながら、大内氏の如上のような解釈には賛同できない点が2つある。まず第1に、ここではすでにみたようにエンゲルスは無益な階級闘争によっていずれかの階級ないし諸階級を含めた社会全体をほろぼさないために、階級対立の内在する社会のうえに外見上立って相対的に独自の位置をしめ、この衝突を調整して緩和し、それを通例、支配階級の立場に立ち、この階級の利益を基本的に守りながら、一定の秩序のなかに制御し総括する役割をはたす公的権力としての国家の必要性を説いている。しかも、このようなエンゲルスの考え方は補足的に引用しているマルクスの考え方とつきあわせてみれば明白なように、基本的に同じものである。ともあれ、ここにおいて、エンゲルスは階級対立そのものから相対的に自立して、社会の枠組を形成し、一種の共同利益を防衛する役割を演じるものとしての国家を重視していると氏は解釈されている。すなわち、氏によれば、エンゲルスはここでは階級対立から相対的に自立しているがゆえにその対立を緩和し、一定の枠組のなかに秩序づける役割をはたすことのできる国家は諸階級にたいして一定の距離をたもち、ある程度の独自性をもっているので、支配階級にも被支配階級にも共通の利益すなわち一種の共同の利益をもたらすことのできるいわば中立的な機関としての側面をもつものであるとみなしていると解釈されている。既述のごとく、エンゲルスやレーニンの指摘にもあるように、実際において階級間の勢力関係のほぼ均衡した一時期にかぎり、このような中立的国家が形成されたし、また将来においてもその一時的な出現の可能性を否定することはもちろんできない。だが、一般的な通常の状態を想定すれば、

(15) 大内秀明「マルクス『資本論』体系と国家」大内秀明・柴垣和夫編『現代の国家と経済』有斐閣選書、1979年、65ページ。

(16) 同上、63ページ。

国家は基本的には支配階級の国家であり、支配の道具となっている。エンゲルスがここで想定しているのは通常の形態の国家であり、したがって国家が行なう調整と総括は基本的には支配階級の利害を擁護する立場からなされていることが指摘されている。それゆえに、一時的に成立する中立的国家を念頭において国家の基本的性格とその一般的諸機能を一般論的に論定することは正しくない。

氏もおそらく、このような特殊な形態を想定して考えておられるのではなかろう。だとすれば、通例の形態の国家において、国家のはたす機能のなかに中立的なものがあるか否かが次に問われなければならない。この点についてもすでに若干のべたように、国家の行なう機能をみれば階級的な性格の鮮明にでている抑圧的機能が中心的機能として存在し、それを補うものとして多かれ少なかれ階級をこえて社会全体に共同の利益をもたらす公共的機能というものがある。そして、この後者の機能をはたすかぎりでの国家は中立的な立場に立っているようにもみえよう。だが、外観上このようにうつり、多少なりとも共同利益をもたらそうとも、その内実は支配階級の要求である体制の安定的維持と強化に必要な範囲内という階級的制約のもとに執行されるものである。この意味で、公共的機能といえどもまったく中立的な色あいをもつ機能ではなく、階級的な性格の投影された階級的機能の一形態をなすものといわなければならない。だから、氏のようにエンゲルスのいう国家の機能のなかに中立的なものをみいだされる解釈は国家の階級国家としての本質を軽視されることになり、正しいものとはいえない。

第2に、氏は上述のような誤まった解釈を人類史の最初の段階である原始共産制社会あるいは原始共同体社会にまでさかのぼって適用し、そこにおいても共同体社会の共同利益に奉付する機能をはたす団体が存在することを根拠として、階級国家の歴史的前提としての共同体国家の存立を措定され、国家の超歴史性を論じられている。いわれるまでもなく、原始共産制社会でも構成員が個人的にはもちろんのこと若干の協力によっても十分に対応できない一般的課題や各構成員間の内部矛盾を解決するための機関が必要であった

だろう。そして、この種の機関は国家生成の可能性を意味するが、しかし国家の出現そのものを意味するものではない。原始共産制社会でも、社会の成員が個人ないし個人の若干の集合体というかたちの個別的単位では対応しきれない社会の経済的、文化的存立の一般的条件の整備を行ない、しかも共同体間や共同体内の成員間の対立を調整緩和し社会を政治的・軍事的に統一するためのいわゆる社会的共同業務が必要となり、さらにそれを専門的に担当する社会的共同機関が当然に設置されることとなったが、ここでの共同体間や共同体内の成員間の矛盾・対立は生産手段や生産物の共有を基礎として発生するものだから、非和解的な敵対的な矛盾ではなく、社会内部で解決可能な一定の内部矛盾にすぎなかった。したがって、この解決のためには社会のうえにそびえ立つ機関としての国家を必要とせず、社会の内部に位置しすべての成員の意思を真に代表する機関で十分であった。ところが、私的所有を基礎とする階級社会では内部に生ずる矛盾は敵対的な矛盾なので、社会内部では解決不能となり、そこで社会のうえに立って、外観的に社会の外からこの矛盾を経済的に支配的な階級の利害を守りつつ調整し、社会を政治的・軍事的に統治する権威が必然的に要請されるにいたり、ここに国家が成立する。それと同時に、他の社会的共同業務も国家に引き継がれ、体制維持に必要なかぎりという階級的制約の範囲内で階級社会のそれぞれの特殊歴史的形態をまとめて遂行される。換言すれば、国家の生成ないし出現はまずは社会的共同業務の遂行を抽象的可能性として措定し、さらに発展すれば社会的共同業務を社会的分業として専門的に担当する社会的共同機関の創設を具体的・実在的可能性として前提し、そのうえに階級社会にのみ生成する敵対的

(17) 上野俊樹氏はこの実在的可能性について、次のようにいわれている。社会的共同業務の原始共同体社会における発現形態としての「社会的職務が社会に対して自立化していくことが国家成立の一つの条件であり、実在的可能性である」（『社会的共同業務』と国家（上）『立命館経済学』第29巻第6号、1981年、99ページ）。

ちなみに、上野氏はこの実在的可能性の現実性への転化を説く場合に、エンゲルスやマルクスがこの実在的可能性を歴史的な中間形態として取りだしている点

矛盾という契機がくわわり、その契機に媒介されて必然化するのである。したがって、氏のような解釈では、国家生成の可能性だけをとりあげて現実的な国家の生成とみなす誤りにおちいるばかりでなく、階級社会における現実的な国家の生成の必然的な法則性を誤まるとらえる結果にもなるように思われる。

III

さて、上記のような根拠によって必然的に生成し、一般的な基本的諸機能をはたすところの国家の本質的な諸特徴について、エンゲルスは国家を知らなかった原始共産制社会の内部に存在した社会的に共同的な自治組織の諸特徴と比較考量することによって下記のように析出している。エンゲルスいわく。「古い氏族組織に比較しての国家の特徴は、第一に、地域による国民の区分である。血の紐帯によって形づくられ結合された古い氏族協同体が……不十分になったのは、大部分は、その成員が一定の領域に緊縛されていることこそ氏族協同体の前提であったのに、このことがとうからおこなわれなくなってしまったためである。領域はもとのままであったが、人間は移動するようになっていた。そこで、領域の区分を出発点にとり、市民には、氏族や種族にかかわりなく、その定住した場所で彼らの公的な権利義務をはたさせるようにした。この所属場所による国民の組織は、あらゆる国家に共通のものである。……第二は、みずから武装力として組織する住民とはもはや直接には一致しない、一つの公的強力の設定である。このような特殊な公的強力が必要なのは、階級分裂以来、住民の自主的に行動する武装組織が不可能となったからである。……この公的強力はどの国家にも存在する。それは、たんに

は注目に値するとして、下記のようにのべられている。「エンゲルスは『共同体の共同業務を担う職務』の社会に対する自立化を『国家』でもあれば『非国家』＝共同体の機関でもであると叙述している……。……『ある一定の発展段階にある共同体の機関』はまだ完全に成立した国家とはいえない純粋の共同体の機関と成立した国家の中間形態であることは明らかである」(同上論文、(上の二)、第30巻第2号、1981年、108～109ページ)。

武装した人間からなりたっているばかりでなく、さらに、氏族社会にはまったく知られていなかった物的付属物、すなわち監獄やあらゆる種類の強制施設からなりたっている。それは、階級対立がなお未発達な社会やへんびな地域では、きわめて徴々たるもの、ほとんどないにひとしいものであるかもしれない。……しかし、国家の内部の階級対立が尖鋭化するにつれて、また境を接する諸国家が大きくなり人口が多くなるにつれて、公的強力は強化される⁽¹⁸⁾。」

かくのように国家の本質的特徴づけを行なったエンゲルスの記述は大変重要なところなので、長きをいとわず引用した。この箇所の主張には難解な部分も含まれているけれども、私なりに解釈すれば下記のようにまとめることができよう。第1に、原始共産制社会においては血の紐帯によって結合された共同体の領域内で、共同体構成員の経済的、政治的、文化的な共同生活をいとなむうえに個人的対応では限界のある一般的に必要な業務としての社会的共同業務が、共同体の共同利益をになう職務として自主的ないし自治的な社会的共同機関をとおして遂行されていた。これにたいして、社会的共同業務の必要性とその業務の社会的分業にもとづく専断的遂行組織の創立を抽象的ならびに実在的可能性としながら、それを現実性に転ずる階級対立という私的所有のうえに生じた非和解的な矛盾を推力として歴史的必然として生じた国家は、血の結びつきから解放されて一定の区域内に所属する住民を国民として組織し、かれらが経済的、政治的、文化的な生活をいとなむために一般的に必要な社会的共同業務を公共的機能という特殊歴史的なかたちにおいて、現存の体制の維持・存続に必要なかぎりで計画し提供するようになった。第2に、原始共産制社会にみられたような社会的共同業務の担当機関の一翼を構成して真に構成員の防衛にあたった自主的な武装集団などが国家機関にのみ奉仕する公的強力⁽¹⁹⁾に変質せしめられる。この武装した公的強力

(18) エンゲルス『家族、私有財産および国家の起源』221～223ページ。

(19) このような事情について、エンゲルスは別のところで次のようにのべている。「氏族制度の諸機関が、一部は改造され、一部は新しい諸機関のわりこみに

は軍隊を核として警察や物的付属物としての監獄や部分的には裁判所などの一大装置として有機的に組織されており、これによって他国を侵略したり他国の侵略にそなえたり、国内においては自国の人民を抑圧したりする。このような公的強力を背景としてはじめて、支配階級の意をうけた国家は国内外の人民を政治的、経済的、文化的・イデオロギー的に管理し支配を強化することができるようになるのである。そして、すでに記したように公的強力に直接、間接にささえられて行使される国家の機能においては、支配階級が被支配階級を政治的、経済的、⁽²⁰⁾ 文化的・イデオロギー的に支配するためにのみ役立つ階級社会に固有の抑圧機能という側面が圧倒的に支配的であるが、ここにも部分的ではあるが社会総体の共通利益となるものも含まれている。もちろん、この公共的機能は現存の社会体制を維持し支配を強める抑圧的機能をより有効に発揮せしめるかぎりではたされるものである。ともあれ、とくにこの公的強力に強く基礎づけられている階級的抑圧機能はたとえば資本主義社会では、資本主義的生産関係を基礎とする社会構成体を保持し、そのなかで資本蓄積を促進せしめることを主たる目的とするものであるけれども、しかしこの場合でもマルクスの指摘にもあるように、国家の「精神的な抑圧力」⁽²¹⁾としての役割は無視できない。いいかえれば、国家の行なう階級的抑圧機能はとりわけそうだが、公共的機能もなんらかのイデオロギー的衣装をまとい、その精神的効果に基本的には助けられながら遂行されているのである。

よっておしのけられて、ついに真の国家官庁によって完全にとってかわられる一方、各自の氏族、フラトリア、種族のうちで自分をまもる真の『武装した人民』にかわって、これらの国家官庁に奉仕し、したがって人民に敵対しても使用される武装した『公的強力』があらわれるというふうにして、国家が発展してきた」(同上、141ページ)。

(20) 小松善雄氏も、国家の行なう経済的機能は直接、間接に公的強力を背景として遂行されることを次のように指摘されている。「公的強力が経済的機能において発現する」(『国家独占資本主義の基礎構造』合同出版、1982年、49ページ)。

(21) マルクス『フランスにおける内乱』315ページ。

上記のように階級社会においてはじめて出現した公的権力としての国家は、武装した軍隊を中核とする公的強力機関を強制力の基盤として、基本的には支配階級の支配のために体系的に構成された絶大な政治的、経済的、文化的・イデオロギー的な管理機構である。しかも、これは階級対立に媒介されて必然化したものであるので、国内の階級対立や国家間の緊張が激化するのにつれてますます大きくなるのは自明の理であろう。

ところで、公的強力にささえられて絶大な権力を有する国家は自己の存在にふさわしい諸機能を行なうために、国家権力を経済的に保証する財政制度と人的に保証する官僚制度を不可避免的に生みだす。これらについてもエンゲルスは若干考察している。まず、財政活動についてであるが、上記のような本質的特質をもつ公的権力としての国家が出現すると、それを維持するための費用として国民の献金すなわち租税がどうしても必要となる。しかも、歴史がすすみ租税だけできたりなくなると、国家は将来の収入を担保として手形をふりだし、借金をするようになる。すなわち、公債を発行するのである。この点について、エンゲルスは下記のようにのべている。「この公的権力を維持するためには、国家の公民の献金が必要である。すなわち、租税である。これは氏族社会にはまったく知られていなかった。しかし、今日ではわれわれはこれを知りすぎるほど知っている。文明の進歩につれて、租税でもうたりなくなる。国家は将来をひきあてに手形をふりだして借款をする。⁽²²⁾すなわち、国債である」。

このように歴史の進展につれてますます複雑で巨大な機構をそなえるようになった国家の諸機能を保証するための経済的基礎としての租税の徴収や国債発行などの諸活動ならびにそれらによって取得した資金の管理と運用の権限、そしてこれらの財政活動に媒介されながら、他面ではその他の法的手段などを使ってもなされる社会の経済的な管理の権限さらには国家権力の中軸となっている公的強力の行使の権限などが、社会のなかから選ばれながら社

(22) エンゲルス『家族、私有財産および国家の起源』223ページ。

会のうえに立って社会からますます疎外された存在となっている官吏あるいは官僚などの担当者の手にはゆだねられている。しかも、この官吏制度あるいは官僚制度は支配階級の代理人になりきっている特権的な高級官僚を軸として編成されている。すなわち、「いまでは官吏は、公的強力と徴税権とをにぎって、社会の機関でありながら社会のうえに立っている⁽²³⁾」。

以上のように、エンゲルスは公的権力としての国家の本質的特質を的確に解明し、そしてそれを経済的にささえる税金や公債の発行およびそれらによって獲得した資金の管理と運用さらにはこれらをとうして行なわれる社会的な経済管理などのいわゆる財政活動を簡潔にのべ、つづいて財政や公的強力を掌握し、そしてそれらを法の名において行使し、国家が階級的諸機能を十全にはたせるように管理する人的組織としての官僚機構についてスケッチ風に記している。エンゲルスは、これでもって国家そのものの起源やその本質やその本質から必然的に生ずる一般的な基本的諸機能についてのもっとも基礎的な分析をおえ、今度はそれをふまえながら視角をかえて、国家の歴史的な発展形態について次のような若干の解明を行ない、国家論の説明をいっそう具体化せしめている。

IV

私的所有の支配する階級社会における階級対立に媒介されて歴史の舞台に登場した国家は、経済的な支配階級の機関として彼らの利益を基本的に守りながら、社会構成体としての統一性を保持する。これを経済的な支配階級の側からみれば、彼らはこの国家機関を手段として政治的、文化的領域にも支配を広げ、逆にこれらの反作用として経済的支配そのものをも強めようとする。それはともかくとして、このような国家は歴史の展開につれて、古代奴隸制国家から封建制国家をへて資本主義社会における代議制国家へと必然的に発達してきたが、その最高の国家形態は民主共和制である。この民主共和

(23) 同上。

制国家⁽²⁴⁾のもとでは、公式にはもはや財産の差は問題とされなくなっており、「富はその権力を間接的に、しかしそうであるだけにいっそう確実に行使す⁽²⁵⁾」ことができる。けだし、有産階級は一方では官吏を買収するというかたちで、他方では政府と取引所を結びつけるというかたちで国家権力を掌握し⁽²⁶⁾うるからである。

さらに、歴史はすすみ、資本主義社会からより高度な社会主義社会へ、さらに社会主義社会から人類史の最高の発展段階としての共産主義社会へと必然的に発展する。このような展開のなかで、資本主義から社会主義への転換を主導した革命的勢力の中核としての労働者階級が支配的となり、国家権力をにぎることによって社会主義を生成せしめるが、しかしまだ十分な発展をしめていない社会主義建設の時期さらには社会主義が一国としてあるいは体制として確立したけれども、他方ではまだ資本主義が体制として存続している時期あるいはその資本主義体制は崩壊したけれども個々の資本主義国として残存し、社会主義世界にたいして一定の資本主義的悪影響をおよぼす社会主義的発展の一時期においても、国内と国外の両面において、しかも時代の進展とともに後者の面に重点をうつしつつ多数者としての被搾取者のために少数者としての搾取者の反撃を防御する特殊な組織である国家権力はまだ必要である。しかし、ここでの国家はすでに過渡的ないわば死滅しはじめた国家に変質している。なぜならば、ここでの国家による抑圧は従前よりも比較的容易で簡単であり、より少ない犠牲ないし費用でことたりるようになる

(24) レーニンも民主共和制について、下記のごとくに書いている。「『富』の無制限の権力が民主共和制ではいっそう確実であるのは、この無制限の権力が資本主義の不完全な政治的外被に依存していないからである。民主共和制は、資本主義の最良の政治的外被であり、そのために、ひとたびこの最良の外被をにぎると…資本は、自分の権力を、きわめて信頼できる確実な土台のうえにきづくので、ブルジョア民主共和制では、人物や制度や党派のどのような交代も、この権力を動揺させることができないのである」（『国家と革命』424ページ）。

(25) エンゲルス『家族、私有財産および国家の起源』225ページ。

(26) 同上。

からである。このような経緯について、国家の発展形態にかんするエンゲルスの基本的な考え方を受けつぎつつさらにそれを豊富化させたレーニンは、次のように語っている。「資本主義のもとでは、本来の意味の国家が、一階級が他の階級を抑圧するための、しかも少数者が多数者を抑圧するための特殊な機構がある。……さらに、資本主義から共産主義へ移行するさいには、抑圧はまだ必要であるが、しかし、それはすでに多数者である被搾取者による少数者である搾取者の抑圧である。抑圧のための特殊な機関、特殊な機構である『国家』は、まだ必要ではあるが、しかし、これはすでに過渡的な国家であり、すでに本来の意味の国家ではない。なぜなら、多数者である昨日までの賃金奴隷が少数者である搾取者を抑圧することは、奴隷や農奴や賃金労働者の反抗を抑圧することよりも、比較的容易で、簡単で、自然なことなので、はるかにわずかな流血ですむであろうし、人類にとってははるかにすくない犠牲ですむだろうからである」⁽²⁷⁾。

さて、人類史の最高の発展段階である共産主義社会へ移行すれば、国家の存立はどのようになるのであろうか。これが最後に解かれなければならない問題である。その解答は明快にしめすことができる。その答えはこうである。国家は永遠の者から存在したのではなく、私有財産制にもとづく社会の諸階級への分裂およびそれにとまなう対立の発生という経済発展の一定の段階において、その分裂と対立を直接の契機にしながら歴史的必然の法則にみちびかれて生成したものである。それゆえに、もしこの諸階級への分裂と対立が必然的なものでなくなり、地球上から完全に消滅し、しかもこの対立が生産力の発達に課していた制約がまったく取りのぞかれ、人間の全面的発達を保障する人類史の最高段階としての共産主義社会に到達すれば、そこでは国家の存立の基盤がなくなり、それとともに国家は死滅の速度をはやめ、そして長期にわたる歴史上の役目をおえ、いわば老衰して自然に死にいたるように自生的に消滅しよう。このような国家の一連の死滅過程について、レ

(27) レーニン『国家と革命』501ページ。

レーニンのようにその後の歴史的発展を経験できなかったという歴史的制約性のゆえに、より具体的には説明できなかったとはいえ、エンゲルスは下記のように基本的に正確な洞察を行ない、その筋道を明らかにしている。エンゲルスいわく。「国家は永遠の昔からあるものではない。国家がなくてもすんでいた社会、国家や国家権力のことを夢想さえしなかった社会が、かつてはあった。社会の諸階級への分裂を必然的にもなる経済的発展の一定の段階において、この分裂によって国家が一つの必然事となったのである。いまわれわれは、これらの階級の存在が必然的なものでなくなったばかりか、かえって断然生産の障害となりつつあるような、そういう生産の発展段階に急歩調で近づいている。階級は、以前にその成立が不可避的であったように、同じく不可避的に消滅するだろう。階級の消滅とともに、国家も不可避的に消滅するだろう。生産者の自由で平等な協力関係を基礎にして生産を組織しかえる社会は、国家機関の全体を、そのときそれが当然におかれるべき場所へうつすであろう。すなわち、糸車や青銅の斧とならべて、古代博物館へ」⁽²⁸⁾。

(28) エンゲルス『家族、私有財産および国家の起源』226ページ。

なお、彼は別の著書にて、次のようにも記している。「国家は最後に実際に全社会の代表者になることによって、自分自身をよけいなものにする。抑圧しておかなければならない社会階級がもはやなくなってしまえば、そして、階級支配が除去され、これまでの生産の無政府状態にもとづく個体生存競争が除去されるとともに、これらのものから生ずる衝突や乱暴もまた除去されてしまえば、特別な抑圧権力である国家を必要とした抑圧しなければならないものはもはやなくななくなる。国家が現実的に全社会の代表者として行動する最初の行為——社会の名において生産手段を掌握すること——は、同時に国家が国家としておこなう最後の自主的な行為である。社会的諸関係への国家権力の干渉は、一つ分野から他の分野へとつぎつぎによけいなものになってゆき、やがてひとりてにねむりこんでしまう。人にたいする統治にかわって、物の管理と生産過程の指導とが現われる。国家は「廃止」されるのではない。それは死滅するのである」（『空想から科学へ』108～109ページ）。

また、レーニンは国家の死滅は民主主義の死滅でもあるということを指摘されている。レーニンいわく。「資本家の反抗がすでに最終的にうちくだかれ、資本家がいなくなり、階級がなくなった（すなわち、社会的生産手段にたいする関係

なお、若干付言すれば、このような国家の消滅とともにどんな社会的機能がのこるかといえ、かつて国家の名において行なわれていた諸機能に固着していた階級的性格が消失し、それに代わってレーニンの指摘する「統制と記帳⁽²⁹⁾」という資本主義下で単純化される傾向をしめす管理機能が純化されて引き継がれ、社会の構成員の本当の利益を守るために遂行されるようになる。この点について、エンゲルスは次のように書いている。国家の行なっていた「公共的機能はその政治的性格を失って、真の社会的利益のために配慮する単純な行政的機能に変化するであろう⁽³⁰⁾」。また、マルクスもエンゲルスと基本的に同趣旨のことを下記のごとくにのべている。「古い政府権力の純然たる抑圧的な諸機関は切りとられなければならなかったが、他方、その正当な機能は、社会そのものに優越する地位を篡奪した権力からもぎとって、社会の責任を負う吏員たちに返還されるはずである⁽³¹⁾」。

V

以上において、主としてエンゲルスの国家論を私なりに整理し分析をくわ

について、社会の成員のあいだに差別がなくなった）共産主義社会ではじめて、そのときはじめて『国家は消滅し自由を論じることができるようになる』。そのときはじめて、ほんとうに完全な民主主義、ほんとうになんの除外例もない民主主義が可能となり、実現されるであらう。そして、そのときはじめて、民主主義は、つぎの単純な事情の結果、死滅しはじめるであらう。すなわち、資本主義的奴隷制から解放された人間、資本主義的搾取の数かぎりない恐ろしさ、野蛮、不合理、醜さから解放された人間は、何世紀ものあいだよく知られ、何千年というものあらゆる格言のなかでくりかえされてきた共同生活の根本的な規則をまもる習慣、暴力がなくても、強制がなくても、隷属関係がなくても、国家と呼ばれる特殊な強制機関がなくても、これらの規則をまもる習慣を、徐々にもつようになるであろうということが、それである」（『国家と革命』500ページ）。

(29) レーニン『国家と革命』488ページ。

(30) エンゲルス「権威について」（『マルクス・エンゲルス全集』第18巻、大月書店、1967年）304ページ。

(31) マルクス『フランスにおける内乱』317ページ。

えたが、これによって彼の国家論ではすでにⅠでのべたようにマルクス主義国家論のもっとも基礎的な説明、すなわち国家出現の必然性やその本質、そしてその一般的諸機能の基本的形態ならびにそれをささえる財政制度や官僚制度、国家の歴史的展開形態とその死滅過程などの重要な諸課題の分析がなされていることが明らかになったものと思われる。

ところが、エンゲルスの生きた時代に比して国家独占資本主義とよばれる今日の資本主義下での国家の役割は、はるかに強められたものになっている。それゆえ、現代資本主義下における経済と国家の関連の強まりについて各方面から分析を行ない、それを科学的に明らかにする仕事が重要なものとなっている。その場合に留意すべき点は、国家そのものや国家と土台との関連にかんする現実の具体的な事象を分析することはもちろん大切であるが、エンゲルスやマルクスによって最初になされた国家にかんする科学的研究をふまえ、さらにレーニンによって豊富化され展開された認識を継承しながら、その延長線上にいわば国家にかんする一般的な基礎理論を確認し発展せしめつつさらにそのうえにより具体的な分析を重ねていくという基礎視角から、それに取り組まなければならないということである。

もちろん、社会科学の各分野ではこのような視角から分析がなされ、一定の科学的な成果が生みだされているが、私の今後の課題はその科学的発展の成果とりわけマルクス経済学の領域における国家独占資本主義論や商業経済論ないし流通経済論での成果に学びながら、私が直接かかわっている流通経済論の部門で資本主義下の流通と国家のより具体的関係についてより体系的・包括的に解明することである。⁽³²⁾

(32) なお、私はこの課題に少しなりともこたえることができればと思い、ひきつづいて本誌に「資本主義下の流通と国家」と題する拙稿の掲載を予定しているので、あわせ読まれたい。